

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第97号 2022年(令和4年)11月14日発行

—— 定例研究会のご案内 ——

東洋音楽学会西日本支部 第293回 定例研究会

日 時 : 2022年 12月 17日 (土) 13:30~16:00

場 所 : オンライン開催

参加方法 : **事前申込制**。西日本支部ウェブサイト(東洋音楽学会 HP > 右上の「西日本支部」ボタン、<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>)掲載の「申込フォーム」よりお申し込みください。受付期間は、12月1日より12月15日です。申し込み後に、別途ご案内を電子メールにてお送りします。(非会員のオブザーバー参加もできますが、この機会にぜひご入会を検討ください。入会問い合わせ・申し込みは、東京の本部事務所へお知らせください。)

例会担当 : 竹内 有一 (京都市立芸術大学)

○修士論文発表

1. 荻生徂徠の楽律の研究—琴律を中心に—

孟 祥健 (京都市立芸術大学大学院修了)

2. 都をどりの芸能研究—明治大正期を中心に—

宝生 紗樹 (京都市立芸術大学大学院修了)

3. 近代中国「新音楽」と「新日本音楽」の誕生と展開

—中国古箏・日本の箏に着目して—

章 又文 (京都市立芸術大学大学院修了)

4. 鹿児島県羽島崎神社の『舟唄』の歌唱について

片岡 彰子 (鹿児島大学大学院修了)

司会 : 梶丸 岳 (京都大学)

## 定例研究会の記録

### 東洋音楽学会西日本支部 第292回 定例研究会

日時：2022年 7月 9日 (土) 14:00～15:45

場所：オンライン開催 (事前申込制)

司会：藺田 郁 (大阪教育大学)

例会担当：竹内 有一 (京都市立芸術大学)

#### ○修士論文発表

音楽の習得経験の人類学的研究 ―民族音楽学者と演奏家に焦点を当てて―

小島 冴月 (大阪大学大学院人間科学研究科修了)

#### (論文要旨)

本論文は、音楽の習得経験が民族音楽学者の研究にどのように活かされているのかということについて、文献調査、民族音楽学者や演奏者へのインテンシブなインタビュー調査、自身の音楽習得の経験を振り返るオートエスノグラフィの記述を試みることで検討するものである。それらを通して民族音楽学における習得の意義について再考察することが本論文の目的である。

第1章「序論」において、論文の目的や概要などについて述べたのち、第2章「民族音楽学における習得の位置づけ」では、先行研究の検討を行った。特にマントル・フッドによって提唱された「バイ・ミュージカルティ」の概念とそれをめぐる議論を取り上げ、整理した。また、民族音楽学者のジョン・ベイリーによる指摘を中心に、いくつかの研究を検討し、従来指摘されていた研究手法としての習得の位置づけを確認した。

第3章「ガムランの音楽習得における困難とその解決―自身の経験から」では、習得のプロセスを具体的に示すという目的のもと、筆者自身のジャワ・ガムランやジャワ舞踊の習得のプロセスを記述した。自身の演奏技術の習得によって、音楽の捉え方が変わり、舞踊譜を作成することで、踊りと音楽の関係についての具体的な説明や分析が可能になったこと、また、楽譜を記すことや分析をすること自体も、発表者自身のガムラン音楽やジャワ舞踊の習得の一つになっていたということも指摘した。

第4章「研究活動における習得」では、長期の習得や現地での習得の経験が研究に活かされる様相を描くために、2名の民族音楽学者へのインタビューと、その人自身によって書かれた論文を参照しながら記述した。本章では、①研究対象にどのように出会い、向き合ってきたのかという点、②演奏技術の習得が、研究活動にどのように活かされているのかという2点に注目した。

第5章「演奏活動における習得」では、インタビューをもとに、民族音楽学者と演奏家によるガムラン演奏の習得や実践の捉え方について記述した。

結論として、音楽の習得経験が民族音楽学者の研究活動に与える意義を再考察した。また、「民族音楽学者が習得をしながら研究活動をする」という現象自体に注目することによって、研究者自身の背景や、研究対象との向き合い方にまで考察の範囲を広げることができるということを指摘した。

(傍聴記：岸 美咲)

本発表は、音楽の習得経験が民族音楽学者の研究にどのように活かされているのかということについて、民族音楽学における習得の意義について再考した修士論文に基づくものである。この論文は、発表者自身がジャワ・ガムランの演奏を学ぶ中で感じた「拍感のずれ」や、研究者が研究対象の音楽を習得することに関して、習得している状態とはいかなる状態なのか、習得することでどの程度現地の人々の感覚を捉えられるのかという問いから出発している。民族音楽学における習得の意義について、文献調査や、民族音楽学者、演奏家、さらに自身の習得の経験を記述するというアプローチで研究が行われた。

まず、先行研究の検討が行われ、フィールドワークと民族音楽学の結びつきの強さや、フィールドワークの位置付けの変化が示された。加えて、複数の音楽性を獲得することを目指すマントル・フッドの「バイ・ミュージカルティ」の議論は、研究者の背景がもたらす研究者の影響を考える点で重要な観点であるということや、ベイリーやタイトンなどの後の研究者によっても発展させられ、議論され続けていることが示された。さらに、ベイリーは習得の意義についても考察したことが明らかにされた。

これらを踏まえ、発表者は自身の習得や研究のための分析の経験について考察した。ジャワ・ガムランや舞踊を習得するという経験において、様々な楽器を学んだことや、舞踊の視点から音楽にアプローチすること、さらに楽譜や舞踊譜を記述するという経験によって、音楽の捉え方が変化したことや、記譜や分析をすることも自身の習得につながっていたことが指摘された。

次に、2名の民族音楽学者の事例が示され、長期にわたる習得や、現地での習得が研究に与える影響が考察された。インタビューにおける語りから、まず、習得することによって、楽器などの演奏を取り巻くものへの研究へ活かすことができ、さらに演奏家としての視点から、インフォーマントと関わるができるということ、加えて、習得において得られる経験から、研究につながる新たな問いが生まれるということが指摘された。演奏家へのインタビュー調査においては、演奏家自身は研究活動とは捉えていないものの、記譜するなど研究者と共通の活動も行なっているということが明らかにされた。

結論では、上記の意義に加え、民族音楽学者の習得に注目することで、民族音楽学者がいかなる背景を持ち、いかに研究対象に向き合っているのかというところまで考察の範囲を広げることができるということが示された。

質疑では、習得を行うことで「現地の人々の音楽的な感性や価値づけ、認識を本当に理解できるのか」という質問がなされ、発表者からは、「研究者の背景や経験からは逃れられず、現地の人々と全く同じ見解を持つのは難しい。しかし、研究者として外側の視点だからこそわかる問いの糸口もあり、理解できないことはマイナスではない。」との回答があった。筆者は、これは、「本当の感覚」や「本当の認識」といったオーセンティシティの問題とつながるものでもあると考えられる。発表中に指摘されていた通り、この研究では、長期の習得や現地調査がまだ行われていない。今後、ぜひ、日本の研究者だけでなく、現地の人々と対話を行い、「現地の人々の感覚にいかに近づくか」という問いに、より深くアプローチしてみたいと思う。また、本研究では、民族音楽学、特に音楽の習得により焦点が当たっていた。発表者は、舞踊の習得にも力を入れているので、今後舞踊の習得に関するより深い考察へ発展させることも可能であると思う。今後の研究のさらなる発展を期

待したい。

○研究発表

コロナ禍における花街の芸能形態の変化について

片山 詩音 (名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程、  
日本学術振興会特別研究員 DC)

(研究要旨)

本発表の目的は、日本における独自の芸能形態を持つ花街と、そこで芸能を披露する芸妓・舞妓を対象に、その芸能の実態について報告するものである。

花街の芸能は様々あるが、披露される芸能の実態については、公的記録にはあまり残ってきていない。また、時代の流れに伴う花街を取り巻く環境の変化は著しく、担い手の減少・高齢化による、存続の危機の問題も長らく抱えている。加えて、今なお続くコロナ禍において、その変化は花街も多分にもれず激しく、窮状にあるとも言えよう。

そこで、コロナ禍以前の花街の芸能の形態の事例を取り上げるとともに、コロナ禍以降の変化についても紹介することとする。

まず、コロナ禍以前の花街の芸能については、全国各地の花街のそれぞれの固有の芸能を事例とする。これは、2017～2020年の約3年間、共同で全国各地の花街について調査を行い、それをまとめた書籍『花街と芸妓・舞妓の世界—継がれゆく全国各地の芸と美と技』(誠文堂新光社、2020年)にて、発表者は編者の一人として、フィールドワークの実施と芸能について執筆したことに基づくものである。花街研究において取り上げられることの多い主要都市部の花街だけでなく、関東・中部・北陸・関西・九州と複数地域にわたって、芸妓・舞妓のみならず、花街関係者や職人、芸能者に対しても調査を行った。それによって、各花街の芸能の固有性が明らかとなった。

しかし、2020年初頭、世界的にコロナ禍の波が押し寄せ、花街も一時休業や舞踊公演の中止・延期、宴席及びそこで披露される芸能において、従来の形式は変化を余儀なくされた。花街はこれまでの料亭の減少や担い手の高齢化に加え、このコロナ禍によって継承がさらに危ぶまれる危機的状況に直面している。一方で、舞踊公演のオンライン配信や映像の導入などの試みから活路を見出す事例もあり、新たな変化をも生み出している。

コロナ禍となって2年余りが経過した現在、少しずつ宴席の実施や、舞踊公演や行事の再開など、花街においても流れが戻りつつあるが、先行きは未だ不透明である。本発表は、それらの窮状を示しつつ、今後芸能に関する調査を継続することで、花街史や芸能史において寄与することを目指す。

(傍聴記：廣井 榮子)

花街の芸能は、座敷と、歌舞練場で行われる舞踊公演(「〇〇をどり」と呼ばれることが多い)が二本柱となっている。

片山氏は、後者の「をどり」に着目し、発表の目的、先行研究、共著の紹介、主要五都市(京都・東京・大阪・名古屋・博多)の花街においてコロナ禍対策がどのように講じられているか、それ以前との比較も含めて中間報告を行った。ほぼ中止となった2020年、2021年から始まったクラウドファンディングやオンライン配信(発表前夜の7月8日、Eテレ

で「鴨川をどり」の配信用の撮影風景が一部放映された)、2022年は従来型と平行して新規の取り組みの両方がみられるという。一方で、芸舞妓を抱える置屋の廃業や発表の場を失った舞妓の育成難も指摘された。フロアからは、今後花街は元の公演形態に戻るのかという質問があった。別のフロアからは、上演の映像化が他ジャンルでもみられる現在、花街の取り組みにも注視したいという意見も寄せられた。

そもそも花街の「をどり」は、明治初期京都の復興策として均一料金による一般向け公演として始まり、なかには150年の歴史をもつ「をどり」もある。当然ながら、「をどり」は重要な観光資源ともなってきた。しかし、時代とともに減少傾向にあった担い手不足に拍車をかけたのが今回のコロナであった。昨年あたりからさまざまな学会や研究会において、演劇・音楽などのパフォーマンスにおけるコロナ禍の影響の検証、配信と著作権をめぐる問題についての議論がさかんに行われているので、横断的にコロナ禍問題をとらえる必要があるように思われる。

さて、発表では五都市を中心に紹介されたが、日本各地の花街を視野にいれた研究であるという説明もあり、意欲的な姿勢がうかがえた。ただ、発表者の「文化人類学」という立脚点がみえてこなかったのは残念であった。また、従来の花街研究において欠落していた「女性研究者」という視点がどう盛り込まれるかによって、花街史・芸能史にも厚みがでてくるだろう。花街に限らず、女性芸能を対象とする研究は多いとはいえない。片山氏の今後に期待したい。

最後に一言。近年、授業・学会でもオンライン化がすすみ、報告者もその恩恵を受けている。便利なツールではあるが、接続や機械トラブルがたえないという悩みもある。人的努力で回避できる場合もあるので、学会においても留意されたい。

---

## お知らせ

### ◇おわび

第292回定例研究会におきまして、本号の傍聴記にもお書きいただいているように、オンライン開催特有の不手際がありましたので、お詫び申し上げます。開催の間際でのオンライン議場のアドレス変更(開催時間を繰り下げて対応しました)、また、記録録音の失敗も生じました。原因は、例会責任者の誤操作によるものです。今後十分留意し、再発のないよう引き継ぎをしていきたいと思っております。

### ◇研究発表の募集

西日本支部の定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属支部、所属機関、連絡先(E-mail等)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

修論・博論の発表は、修了認定大学の所在する支部が受け付けます。修了認定大学に勤務される会員は、修論・博論発表の候補に関する情報を当該支部へお寄せくださいますようお願いいたします。

◇オンラインによる例会開催について

好評の声が多いため、当面はオンライン開催を優先し継続する予定です。反面、オンラインで参加いただいていない会員のご意見ご要望を、おうかがいしたいと思います。忌憚のないご意見をお寄せください。

◇メールアドレスを変更されたとき

東京の本部事務所 (LEN03210@nifty.ne.jp) まで、必ずお知らせください。今後、学会全体として web を利用した会員専用サービスを充実させる計画があり、その際には電子メールの登録が必須になります。ご協力をお願いいたします。

◇支部長あいさつ

暑かった夏ですが、みなさまお変わりありませんか。やっとすずしく、というか寒くなってきました。体調をくずされないように、お気をつけください。

東洋音楽学会の年度は、9月からはじまります。2022年(令和4)9月からの2年間、西日本支部長をつとめることになりました。支部長をつとめるのは2度目ですので、前回の反省もふまえて、よりもよいかたちで運営したいと思っています。みなさまのご協力をいたします。

東洋音楽学会の会員には、例会や大会での発表、そして、機関誌への投稿をする権利があります。たくさん発表し、たくさん投稿していこうではありませんか。この西日本支部だよりも、年に3回刊行することになっています。例会の報告だけではなく、時季にあったエッセイや論考なども、掲載していければいいなと思います。

まだ、理事会の承認はえられていない段階ですが、あたらしい西日本支部委員、そして参事の候補も決まっています。音楽研究をもりあげるために、みなさんの積極的な参加をお待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。

藤田 隆則 (ふじた たかのり)

(編集担当：明木 茂夫、竹内 有一、藤田 隆則)

---

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会 西日本支部

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田隆則研究室気付

東洋音楽学会 西日本支部事務局

TEL 075-334-2393 E-mail tfujita@kcu.ac.jp

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>